「親鸞と現代　第Ⅰ期」第六回

親鸞和讃　～おはなし＆ピアノコンサート

作曲家　平田聖子
同朋大学准教授　安藤弥

はじめに

［安藤］みなさん、こんにちは。本日は、同朋大学仏教学科主催講座「親鸞と現代　第六回　〔特別企画〕　親鸞和讃おはなし＆ピアノコンサート」にお越しくださいまして、誠にありがとうございます。

本日は初めてお越しの方も大勢お見えですので、連続講座の趣旨からあらためて説明し、今回の特別企画に至るまでのことをお話ししたいと存じます。

この同朋大学は、浄土真宗の教えに基づく大学で、真宗大谷派、東本願寺の宗門関係学校です。浄土真宗を開いた宗祖親鸞聖人（以下「親鸞」）の「同朋」精神と、〝日本仏教の始まりの人〟として崇敬される「聖徳太子」の

「和敬」の精神を大切にし、「同朋和敬」を建学の理念としています。

さて、本年度の二〇一一（平成二十三）年は、親鸞の七百五十回忌に当たりまして、御遠忌法要が勤められますとともに、これを機縁に親鸞についてのさまざまな確かめがなされております。そうしたところ、三月十一日には東日本大震災が発生いたしました。多くの人たちのいのちが失われ、また今なお〝原発という人災〟に、私たち多くの日本人が直面し続けています。これはただちに解決できる問題ではなく、人間社会の深い関わりとして注視し、そして憶念し続けていくこと、考え続けていくことが必要ではないかと感じております。

このように混迷する現代社会において、私たちはどう生きていくのか。あらためて親鸞の生涯とその教えに学んでいきたい。また、被災者支援をどのようなかたちで大学としてできるか。さまざまなことを考えまして、親鸞七百五十回忌記念、東日本大震災チャリティーとしまして、六月からこの連続講座を開催しております。全七回、仏教学科の専任教員が各回担当して、それぞれの専門分野から「親鸞と現代」という課題に向き合い、問題提起をし続けてまいりました。受講料は懇志として一口五百円をお願いしておりまして、講座終了後に義援金として被災地にお送りすることにしております。

こうした連続講座の第六回目に、このような特別企画を組ませていただきましたのは、さまざまなご縁の重なり合いによるものです。私は歴史学を専門にしておりまして、今回の機縁に歴史の視点から親鸞和讃を課題としたいと思い立ちました。親鸞和讃とは、親鸞が浄土真宗の教えに出遇えたよろこびを表した讃歌です。それと同時に、本日お招きいたしました平田聖子さんのことが頭に思い浮かびました。平田さんは、後ほどご紹介いたしますけれ

ども、親鸞の和讃を作曲しておられる音楽家であり作曲家です。浄土真宗の教えを、和讃という歌で表現した鎌倉時代の親鸞。そしてその和讃に作曲して、教えをひろめようとする平田さんのご活躍。仏教と音楽をこのようなかたちで一度、つないでみたいということで今回の内容を企画し、平田さんにお願いしたところ、ご快諾いただきまして、本日の開催の運びとなった次第です。

なお、この会場は「めいおんホール」と申します。このホールは、同朋大学と同じ同朋学園の名古屋音楽大学の施設です。二大学は同じこの名古屋キャンパス内にあります。ホールの使用許可については、名古屋音楽大学の皆様にご快諾いただきました。また本日も音響・企画支援として川井敏生さんに、スタッフとしてお手伝いいただいております。このように多くの方のご協力をいただいておりますことを、ここでご披露し、御礼申しあげます。

それでは、ただ今より開講させていただきます。まずは何よりもはじめに一つ聴いていただきたいと思います。最初の和讃は「弥陀の本願信ずべし」です。この「弥陀の本願信ずべし」という和讃は、よく知られている和讃です。『真宗聖典』（東本願寺版）に入っている蓮如上人の文明版『三帖和讃』の『正像末（法）和讃』では、最初に掲げられている和讃ですが、もともとは『正像末（法）和讃』の最後に置かれていました。親鸞八十五歳の時に夢のお告げを受け、その夢告の中で感じ取った言葉だと親鸞自身が記しています。平田聖子さんに今から演奏していただきますが、夢告の世界を表現するフルートの前奏から歌に入っていく流れになります。それではよろしくお願いいたします。

「弥陀の本願信ずべし」～『正像末法和讃』から～

フルートの前奏（ピアノ伴奏）

弥陀の本願信ずべし
弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばさとるなり
無上覚をばさとるなり
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

［安藤］ありがとうございました。フルートを吹いていただきましたのは、平田聖子さんのご長女の平田万喜さんです。

それでは、あらためて、平田聖子さんをご紹介させていただきます。平田聖子さんは、愛知県岡崎市の真宗門徒のご家庭に生まれ育ちました。愛知県立芸術大学音楽学部作曲科卒業。ミュンヘンに留学。一九八五（昭和六十）年に文化庁舞台芸術創作奨励賞を受賞されています。そして、一九九五（平成七）年より仏教音楽をライフワーク

とされまして、二〇〇五（平成十七）年には、法藏館より『親鸞聖人ご和讃による曲集　本願力にあいぬれば』を刊行されました。各地のコンサートホールやドイツ、ハワイ、ロサンゼルスなど海外でも演奏されていて、日本の宗教曲として好評を博しています。また、日本各地のお寺で親鸞和讃を愛唱され、音楽法要にも用いられています。二〇〇九（平成二十一）年に発売されたCD『親鸞聖人ご和讃による曲集　本願力にあいぬれば』は、名古屋音楽大学の波多野均先生と大阪ゲヴァントハウス合唱団の演奏によるもので、絶賛発売中であります。そして今年、親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の機縁に、京都東本願寺の御影堂におきまして、『教行信証』と和讃の曲集「慶ばしいかな」を、大合唱団を指揮して演奏されました。

そもそも、私が平田さんにお願いすることができたご縁をもう少しお話しさせていただきますと、先ほどフルートを演奏していただいた万喜さんは、私の生まれ育ったお寺の境内にあり、私の母が園長をしている保育園に入園されました。そこからのつながりで、さらに二〇〇三（平成十五）年には私の仏前結婚式において、平田さんにお願いしてピアノを弾いていただきました。また、その前後から平田さんのご指導のもとお寺の合唱団が結成され、今に至るまでご指導をいただき続けています。そうしたご縁で、今回お願いすることができたわけです。平田さんには、後ほど第Ⅱ部でまた、お話をうかがいたいと思います。

第Ⅰ部　講義「親鸞と和讃について」（安藤　弥）

（1）親鸞の生涯

親鸞の生涯について、少しお話しさせていただきます。親鸞は承安三（一一七三）年に生まれました。平安時代の末期です。父は公家の日野有範と言われています。養和元（一一八一）年、九歳の時に慈円のもとで得度したとされ、天台宗の総本山である比叡山延暦寺で修行・修学しました。ところが、二十年間にわたる修行・修学の中でいつしか深い苦悩の闇に迷われていきました。その深い苦悩の果てに親鸞は建仁元（一二〇一）年、二十九歳の時に比叡山を下り、洛中六角堂で夢のお告げを受け、法然のもとに行き、法然が説く専修念仏の教えに帰依しました。その後、法然の弟子として五年ほどの月日を過ごすのですが、建永二（一二〇七）年に専修念仏の教えが禁止・弾圧され、親鸞は越後へと流罪になってしまいました。時に親鸞三十五歳でした。親鸞は後に回顧し、この法難において「非僧非俗」の境地を確かめ「愚禿釈親鸞」と名のったとしています。

その後、三十九歳で流罪を許され、四十二歳となる建保二（一二一四）年ごろに関東に移りました。その道中でも飢饉という災害に直面し、また深く苦悩しますが、浄土真宗の教えを確かめ直していきます。そして関東時代の五十二歳前後に『教行信証』（正式名称『顕浄土真実教行証文類』）を執筆しました。ただ、この『教行信証』は晩年まで書き続けていて、いつどこで完成したとなかなか言えない著作だと考えられています。その後、五十九歳ま

では確実に関東にいて、おそらく多くの人たちに教えを説いていましたが、六十歳を過ぎたころに京都に帰ります。

親鸞はその後、九十歳まで生きました。その中で七十六歳の時に、『浄土和讃』と『浄土高僧和讃』の二つを製作しました。ここから親鸞はさまざまな著作をなしていきました。ちなみに親鸞の著作はその生涯で、二十点ほどあるといわれています。

ただ親鸞の晩年にはまたさまざまなことが起こりました。八十歳前後には、関東に残した同朋・門弟たちの中で教えをめぐる理解の相違から、対立も含む混乱が起こってしまいました。そこで、混乱収束のために息子の善鸞が関東に下向するのですが、他ならぬその善鸞が親鸞に背く言動をしてしまい、建長八（一二五六）年、親鸞八十四歳に、善鸞を義絶するという事件がありました。その翌年、康元二（一二五七）年に、先ほどフルートとピアノで歌っていただきました「弥陀の本願信ずべし」の夢告を感得し、その年とその翌年をかけて『正像末法和讃』を著しました。訪ねてきた関東の同朋・門弟に対して「獲得名号　自然法爾」を説くこともありました。そして九〇歳で亡くなるという生涯を送られました。

（2）親鸞の思想と「和讃」

親鸞の思想については、『歎異抄』第二条に、法然上人から聞いた言葉として、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という言葉があります。阿弥陀如来は方便として絵像や木像で表現されますが、そこに描かれる光明に象徴される摂取不捨の救済、すなわち、すべての人を摂め取り、決して捨てず、ひとしく必ず救うという誓

い、願いのもとに救われていく。そうした「如来の御はからいにて往生す」という言葉を、親鸞は関東の門弟に手紙で送っています。この阿弥陀如来の救済に対して、私たちは「ただ念仏して」しかありません。阿弥陀如来への報恩謝徳として、南無阿弥陀仏の名号を称えるのが真宗門徒の行儀となります。

こうした親鸞の思想を顕らかに示したのが、その主著『教行信証』です。『教行信証』は教・行・信・証・真仏土・化身土の六巻編成になっていて、その全体を通して、専修念仏の教えが確かなものであることを、多くの経・論・釈を集成して証明したものです。漢文体で記され、読むのは難しいですが、この『教行信証』により、浄土真宗、専修念仏の教えがはっきりと確かめられました。

その『教行信証』と対になるのが「和讃」になります。「和讃」については、「やわらげほめ」と親鸞自身が示しています。『浄土和讃』中の「現世利益和讃」の表題の左訓に示された表記です。すなわち、和語でやわらかく仏法を讃嘆するという意味で、今回のテーマから一言で言いきれば、和讃とは歌（詩）です。讃歌です。七五調で言葉がつむぎだされ、四句一首の和讃、歌（詩）がかなりの量、製作されました。最初に歌っていただいた「弥陀の本願信ずべし」の和讃からしておわかりいただけるかと思います。『教行信証』がもっとも堅い漢文体であるのに対して、「和讃」はもっともやわらかく表現したものです。ただ易しくわかりやすいだけではなく、『教行信証』で確かめられた教えをすべてやわらかく表現したものでないかと指摘されています。『教行信証』が堅く、「和讃」でやわらかく、教えを確かめ、誉め讃えていくという意味で対と言ってもよいということです。なお『歎異抄』は、親鸞の言行録で、唯円房という弟子（同朋）がまとめたものと言われております。

ここから、親鸞の「和讃」について、もう少しお話ししていきます。私たちが今、親しみやすく目にするのは、『真宗聖典』（東本願寺版）にも載っている『三帖和讃』と言われているものです。帰京後の親鸞は七十五歳の時、『教行信証』を完成させることができたといったん考えたようです。その翌年に『浄土和讃』『浄土高僧和讃』を撰述し、さらに八十四歳の善鸞義絶事件の後に『正像末法和讃』を撰述しました。『浄土和讃』『（浄土）高僧和讃』『正像末（法）和讃』のこの三帖の和讃を、本願寺蓮如が戦国時代の文明五（一四七三）年に『正信偈』とともに開版し、広く知られていくことになります。ただし、『三帖和讃』という表現自体は、南北朝時代の史料に出ており、親鸞自身が「三帖」とは言ったことは確かめられていませんが、早い時点から三帖セットとされていたようです。

このほかに聖徳太子を讃えた『皇太子聖徳奉讃』や、本当に親鸞の制作なのか、真偽の問題を含めて、さまざまな研究や議論があるのですが、親鸞和讃と伝えられるものは五〇〇首以上あると言われています。文明版『三帖和讃』にしてみれば、『浄土和讃』に「現世利益和讃」と言われる和讃が付されていたり、『正像末（法）和讃』に「愚禿悲歎述懐」という和讃などが付されていたりもするなど、詳しく見ようとするとさらに複雑です。

さらに、和讃の特徴について紹介していきます。最初の『浄土和讃』は、浄土三部経あるいは曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』などに基づいたもので、阿弥陀如来の救済の世界、浄土を讃嘆する内容で調えられています。続いて『浄土高僧和讃』は、釈迦如来が説き示した阿弥陀如来の教えを、インド・中国・日本の三国において受け継ぎ、説き示した龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空という七人の高僧を讃えた詩になります。

この二つの「和讃」は七十六歳の時に併せて制作しているので、歌でわかりやすくありながら、その内容は理路整然ともしています。それに対して善鸞事件による深い悲しみから立ち上がっていこうとする中で製作された『正像末法和讃』は、人生の課題に向き合い、教えに確かめようとする親鸞の心境が吐露されていくように書き出され、その後に少し並びを調えていく制作過程がうかがえます。

ところで、実は親鸞直筆で完全版の『三帖和讃』は残っていません。現存最古の『三帖和讃』は、国宝に指定されている専修寺本です。専修寺本は、本文のいくつかと、その左訓の多くが親鸞の直筆ですが、本文のほとんどは高田門徒の真仏の筆だと言われています。もしくは顕智という説もあるようです。この専修寺本『三帖和讃』が現存最古で、その中の一部、『正像末法和讃』では第一首から第九首までが、親鸞の直筆と言われています。

また、親鸞は、『和讃』について左訓と右訓、圏発点というものを示しています。ここに一例を出します。よく読まれる「仏光照曜最第一」という和讃の一句ですが、この右側に「クワウ」と「セウ」「エウ」というように、読みやすいように振り仮名が振ってあります。左側に「サイハ　コトニ　モトモ　スクレタリト　イフココロナリ」と、「最というのは特に最も優れているという意味である」という説明が書いてあります。一説によれば、本文は親鸞が門弟（同朋）に書写させ、それに振り仮名や説明、圏発点を親鸞が書き加え、聖教書写を通した教えの伝達をはかるとともに、教えをわかりやすく表現するというアレンジをしたのではないか。圏発点というのは、漢字の四隅に四声と呼ばれる表記を付すものだから、明らかに読む、歌う詩であることを意識した表現。ただわかりやすいだけではなく、意味深い内容の表現をしていると言われております。

（3）仏教と音楽

今日は「仏教と音楽のコラボレーション」企画と言いましたが、音楽の発生と仏教とは深く結びついています。原始仏教の時代、インドにおける最初の仏教では、音やメロディーというのは修行を妨げるよくないものとみなされていましたが、その後、仏教が中央アジアへと伝播し、大乗仏教が説かれるようになると、微妙なる仏・菩薩の声として、あるいは仏・菩薩の教えを讃嘆する信仰の表現として、音楽は積極的に用いられるようになったとされています。紀元前後の時点から仏教と音楽がコラボレーションしているわけで、音を奏でる楽器の伝播も含め、古くから仏教と音楽には深い関わりがありました。

そして仏教が中国に伝播し、儀式における音楽の導入が本格化します。僧侶の経典読誦が微妙なる音楽に聞こえたということから声明が生まれたとされ、儀式における声明が発展していきます。そうした中国仏教が日本に伝播し、平安時代になりますと、中国の漢文形式のものばかりでなく、日本語で表現していくという和文形式が積極的に取り入れられるようになります。平安時代以降の流行の中で、親鸞自身も浄土真宗の「和讃」を製作し、それが現在これだけ残るような大きな展開・受容になったわけです。

先ほど、戦国時代に本願寺蓮如が『三帖和讃』ならびに『正信偈』を開版したとお話しましたが、『正信偈』というのは、『教行信証』行巻の最後に収められている偈文、やはりこれも歌です。浄土真宗の教えが漢文体、七言百二十句の中に込められており、深い内容表現とともに、教えに出遇えたよろこびを歌うものです。『正信偈』、念仏そして「和讃」を組み合わせてお勤めするのが真宗門徒の行儀になっています。蓮如からさかのぼり、「和讃」

を歌うことが史料上いつから確かめられるかについては、南北朝時代の北陸における史料が初見となりますが、和讃の表現それ自体が歌うことを前提に制作されたことは疑いありません。親鸞の時代から現代にいたるまで、真宗門徒は七百五十年以上、和讃を歌い続けてきました。その「和讃」が現代社会にどのように響くのかということを確かめたいということで、今回の企画になったということです。

以上で講義を終え、第Ⅱ部に入ってまいりたいと思います。平田聖子さんにあらためてご登壇いただきます。

第Ⅱ部　トーク＆コンサート（平田聖子×安藤弥）

［平田］多方面にわたって、親鸞聖人のことをいろいろ聞かせていただき、ありがとうございました。

［安藤］ありがとうございました。ここからは平田さんとお話しながら、聞いていく形にしていきたいと思います。まずは、そもそもなぜ「和讃」を作曲されようと思われたのでしょうか。あらためておうかがいしたいです。最初に歌っていただいた「弥陀の本願信ずべし」の作曲の経緯も含めて、お話しいただければと思います。

［平田］「弥陀の本願信ずべし」を作曲したきっかけは、私は浄土真宗のみ教えを仰ぐ家庭に生まれまして、それがずっと当たり前の生活でした。報恩講なども、一番いいべべ（服）を着て皆で毎日お参りしようとか、お斎をよばれるとか、お寺に行くと「よう参った。よう参った」と言ってお駄賃をくれるお婆さんがいたとか。お寺はよいところだなあって大好きでした。そんな家で育った私ですが、作曲というものを芸大で学び、いつかこの作曲で私

自身が救われる喜びを表現できたらいいなと、ずいぶん若い時から思っていました。

芸大というところは、いろいろな勉強をするんですが、音を追求して、自分の内部の、自分にできないものを探るような作曲をしていました。私のお祖母ちゃんが平成十六（二〇〇四）年十二月に九十一歳で亡くなったんですが、そのお祖母ちゃんはとっても聞法者でした。そのお祖母ちゃんに、うちの母も育てられたんですが、平成七（一九九五）年にお説教を聞いて帰ってきて、「『弥陀の本願信ずべし』、これに作曲してくれるかな」と言って、せっかく作曲を習ったんだから、こういう良い和讃に作曲してほしいと言ってくれたんです。でも、「たった四行の詩か。すぐできるわ」と実はなめていました。

そんな傲慢な私でしたので、なかなか作曲しなかったのですが、その年の秋に、洗濯物を干しながら、そろそろ親孝行しなければいけないと考えていて、「弥陀の本願信ずべし」「弥陀の本願信ずべし」を毎日何度も何度も言って、とにかく覚えて、洗濯物を干していたんですね。そうしたら、「弥陀の本願信ずべし」のイントロとメロディーが出てきたんですよ。「これはできた、できた」と思って、急いでピアノ伴奏をつけて全部やって、テープにも録音しました。そうしていたら母がお朝事（朝勤行）から帰ってきて、できたよと渡して生演奏して聴かせました。そしたら「これはいい、これはいい」と喜んで、またすぐにお寺に戻っていって聴いてもらって、みんな一緒に喜んでもらって、というスタートなんです。

今思うと不思議なんですけれども、安藤先生のお話をお聞きして、「弥陀の本願信ずべし」という「和讃」がつくられたのもすごいことなんだなと思います。「弥陀の本願信ずべし」というのは、言葉だけではなくて、親鸞聖

人が二十九歳に法然上人に出遇われた時から、ずっと心に沁みついて、その言葉とともに生きてきたんだと思うんです。それが善鸞義絶事件で深い悲しみにおちいられて、けれどもやはり「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」（『教行信証』総序）という、「自分の思いを難思の法海に流す」という親鸞聖人ですので、どんなに悲しいことが起ころうとも、阿弥陀さんの救いの中に自分の思いを流して、力強く支えられていた親鸞聖人だと思います。「弥陀の本願信ずべし」、これしかないと。

その一番大事な「和讃」に最初に作曲できたということで、これは本当にありがたいことです。私が作曲した中でも、この曲が一番覚えて歌いやすいと言ってくださる曲になったんです。それから十六年たってきましたが、やはりこれは阿弥陀如来のはたらきで、阿弥陀さまがはたらいてくださって、母の口から私に作曲させてくださって、この私を救うための阿弥陀さまのてだてかなと思っています。頭の高い私でしたが、この十六年で変わりました。

［安藤］ありがとうございます。洗濯をしながらふと口ずさむというお話でしたが、平田さんの「和讃」のメロディーは、普段歩いていて何となく口ずさんでしまうような、日常の中で出てくるような感じです。親鸞聖人も、この和讃が夢のお告げで出てきたという、今だと何か劇的なようにも聞こえますが、日本の中世における夢の世界というのは、決して劇的なものではなくて、日常の中の深い思いが、ふと表れるものと考えられていますので、通じるものがあると思います。お母さん、お祖母さんのご縁もあって作曲に取り組まれたということでしたが、そろそろ二曲目をお願いしたいと思います。「仏法不思議」という「和讃」があります。よろしくお願いします。

［平田］では二曲目に入ります。二年目に作曲した曲になります。よろしくお願いします。

「仏法不思議」

いつつの不思議をとくなかに
仏法不思議にしくぞなき
仏法不思議といふことは
仏法不思議といふことは
弥陀の弘誓になづけたり
南無阿弥陀仏
いつつの不思議をとくなかに
仏法不思議にしくぞなき
仏法不思議といふことは
仏法不思議といふことは
弥陀の弘誓になづけたり
南無阿弥陀仏

［安藤］ありがとうございました。続いて、一番古い専修寺本の『正像末法和讃』にある親鸞直筆と言われる「弥陀の名号をとなえつつ」についても、平田さんは作曲されていますので、お願いします。

「弥陀の名号となえつつ」
弥陀の名号となえつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
弥陀の名号となえつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

［安藤］ありがとうございました。この「和讃」は親鸞直筆と考えられていて、後に文明版『三帖和讃』では『浄土和讃』の冒頭に配置され直しています。弥陀の名号を称え、阿弥陀に深い報恩謝徳の念を示して、名号を称えながら信心をまことにしていく人。これは阿弥陀を憶念して思い続けていく心をすでに持っている、そして仏恩に報ずるという思いがある。こういう信心を勧める意味があるので、冒頭に置かれ、大切な「和讃」と位置づけられたのだと思います。

個人的な話で恐縮ですが、私が仏前結婚式をあげた際に、平田さんにご指導いただいている合唱団でこの「弥陀の名号となえつつ」を歌っていただきました。参列者の中で聞いているうちに涙が出てきて、最後の「南無阿弥陀仏」が繰り返されるところで思い切り泣かれてしまったという話を後で聞きました。そういう涙が出てきてしまう御念仏、「和讃」であることを感じ取ったわけです。そんな想い出のある「和讃」でもあります。

［平田］ありがとうございます。とてもうれしいです。最後の「南無阿弥陀仏」のところですね。他の方にも「ここだけで泣けてきます」と言われます。ある方がお寺におまいりに来られて、「私ね、信心が全然ないんです。信心が全然ないのに泣けるんです」と言ってくださって、とてもうれしかったんです。「和讃」は四行だけなんですが、最初の「弥陀の本願信ずべし」を作曲した時から、どういうわけか、御念仏、「南無阿弥陀仏」を入れたくなるんですね。先ほどの「弥陀の本願信ずべし」だと、「南無阿弥陀仏」は「阿弥陀さまのお救いに帰依します」と

いう御念仏だと思いますし、今の「南無阿弥陀仏」は、「仏恩報ずるおもいあり」ですから、感謝の念仏であり、さらに阿弥陀さまが助けるぞ、助けるぞと呼んでくださっているような御念仏だと、私には阿弥陀さんの呼び声に聞こえます。それで泣けるんじゃないかなと思っています。

［安藤］ありがとうございます。「仏恩報ずるおもいあり」から自然と御念仏が出てくるという、「和讃」が必ず御念仏とともにあるという感慨深い内容であります。そうした阿弥陀如来の救いが、「南無阿弥陀仏」と繰り返し歌う一つの重要点になってくるのですが、私たちを救ってくださる阿弥陀如来の世界、浄土を表現したのが『浄土和讃』です。この『浄土和讃』の中に一つ素敵な「和讃」があって、これも平田さんの作曲がありまして、歌われ方にもいろんなバージョンがあって感慨深いものがあります。これを四曲目に歌っていただきたいです。難しそうな字がいくつか出ていますが、これはどういうことなのか、平田さんの作曲のイメージとともにご説明をいただきたいと思います。

［平田］これは作曲しやすかったんですが、御浄土の風景を表していまして「清風宝樹」、「宝樹」というのは宝の樹と書いてあります。宝というのは金、銀、瑠璃など七つの宝でできた木々が生えていて、美しい風景です。そういうところに、阿弥陀さんが吹かせた南無阿弥陀仏の風が吹くのです。そうすると木や枝や実や葉っぱがぶつかって、五つの音がします。その五つの音を雅楽の音で表しているんですね。宮・商・角・微・羽という雅楽の音階で、壱越調という調階です。宮と商というのはレとミですので、西洋音楽ですと不協和音になりますが、御浄土ではすごく綺麗な素晴らしい音楽になって聴こえてくる。そういう御浄土の世界を表しておりまして、「清浄勲を礼すべ

し」と言われています。聴いていただく歌は、風をピアノで鳴らします。御浄土には美しい鳥もいるので、フルートで鳥を鳴かせたいと思います。そして「清風宝樹」という言葉は、いかにも風が吹いてきれいな響きを感じましたので、最初は「清風宝樹　清風宝樹」と何度も繰り返しながら入り出そうと思いましたので、それを聴きながら感じていただきましたらありがたいです。この曲はおおむね壱越調でできております。それではいきます。

「清風宝樹をふくときは」

清風宝樹
清風宝樹
清風宝樹
清風宝樹
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
清風宝樹をふくときは
いつつの音声いだしつつ
宮商和して自然なり
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
清浄勲を礼すべし

清風宝樹
清風宝樹
清風宝樹
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
清風宝樹をふくときは
いつつの音声いだしつつ
宮商和して自然なり
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
清浄勲を礼すべし
清風宝樹

［安藤］ありがとうございます。先ほど、いろんなバリエーションがあると申しました。平田さんはＣＤを出されていまして、その中にこの「清風宝樹をふくときは」のテノールのソロのついた混声四部合唱がありますので、最初の一番だけお聴きいただきたいと思います。

［平田］この名古屋音楽大学でテノールを教えていらっしゃる波多野均先生に歌っていただいております。波多野先生も御念仏の御縁のある先生です。これを混声合唱でやりますので、非常に立体的な広がりが出ております。

CD「清風宝樹をふくときは」一番

［安藤］ありがとうございました。また、波多野先生にも歌っていただく機会があればと思います。

そろそろ終わりの時間に近づいてきましたので、最後の話に入ってまいります。今回の講座の趣旨から、やはりこの親鸞和讃がどのように現代社会に響いていくのかということを尋ねたいと思います。

ちょっとまだまとまらないのですが、私が思いますのは今回、三・一一の東日本大震災があって、人間社会が非常に困難を極めました。今なお極めています。実はこの災害に直面し困難を極める人間の世界というものは、親鸞聖人自身が今から八百年程前に日常的に見ていた世界ではないかということです。これはまったく非日常なのではなくて、実は人間社会が常に抱えている日常の問題なのだということをあらためて思い知らされました。その中で親鸞は「和讃」という歌をつくって表現しました。先ほどもお話がありましたが、信心がないと思っていてもふと口ずさんでしまう、そうした中に自然に讃嘆していくという行いがあったのではないかと思います。

親鸞が「和讃」を製作し終えた八十六歳から、さらに八十八歳にかけては、全国的に大飢饉がおこっていて、それこそ人がどんどん死んでいく時代状況がありました。そこで関東の同朋、門弟から親鸞聖人に対して「たくさんの人が亡くなっていることとどのように向き合っていったらよいのか」を問うお手紙が来ます。それに対して親鸞聖人は、「とても悲しいことだけれども、生死無常のことわりは如来がすでに説き聞かせておられることである」とお返事します。そして何よりも「善信が身には、臨終の善悪をばもうさず」と述べ、亡くなっていくありさまが

問題なのではなくて、生きている間に信心決定して如来のはたらきによって往生していく」ことの大切さをお手紙で返されています。『末灯鈔』の第六通になります。これが非常に印象に残ります。現実社会を受けとめながら、それでも生きていくという「自信」を示し、そこに立ちながら「和讃」を製作した親鸞聖人ではなかったかと思います。先ほどの「和讃」の「宮商和して自然なり」における「自然」とは詳しくは「自然法爾」であり、さらに「獲得名号　自然法爾」と『末灯鈔』第五通に示されていますが、「御念仏の教えをいただき、あるがままを生きていく」ということです。

歌や言葉は、昔は今以上に大事であったと思います。文字を読めない人が多かったですから、歌や言葉で仏法を表し、伝わっていくという世界でした。そうした歌は現代以上に響いたと思うんですけれども、現代でもなお響いていくんではないかと思います。それは絶望ではなく、そこから立ち上がっていく力が、仏教にもあり、歌にもあり、そういう立ち上がって生きていく力を示してくれているのが、親鸞の最晩年の境地ではないかなと、今年一年考えさせていただきました。平田さんは、こうした「和讃」を作曲されながら活動されていますが、今回の御縁をどのように受けとめておられますか。

［平田］私は御念仏と御和讃を中心に作曲していますが、これが自分の一番のよろこびです。自分のよろこびで作ったものが、皆さんにも歌っていただけるのはすごくうれしいなと思います。ずっと作り続けていきたいと思っています。

音楽大学では西洋音楽を学ぶ方が多いと思います。「アーメン」の歌は皆、歌うんです。私もなるべく皆によろ

こんでいただける曲を書いて、そして「アーメン」と同じぐらい「南無阿弥陀仏」が歌われるようになって、懐かしいなと思い出してもらいたい。親鸞聖人のみ教えに出遇って人生を歩まれるきっかけ、お手伝いを、私にもできたらうれしいなと思っています。そんな気持ちもあって、今後も作曲していこうと思います。

[安藤] ありがとうございます。それでは最後になります。そうした思いのこもった「和讃」として「本願力にあいぬれば」、この歌を最後に締めくくらせていただきたいと思います。

「本願力にあいぬれば」〜『浄土高僧和讃』天親和讃から〜

本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし
本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
功徳の宝海みちみちて

煩悩の濁水へだてなし

［安藤］ありがとうございました。私としては念願がかないました。平田さんをはじめ本当に皆様に感謝申しあげます。本当にありがとうございました。

アンコール

［平田］ありがとうございます。うれしいのでもう一曲やらせていただきます。「無慚無愧のこの身にて」を歌わせてもらいます。

「無慚無愧のこの身にて」
無慚無愧のこの身にて
まことのこころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば
功徳は十方にみちたまふ
無慚無愧のこの身にて
まことのこころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば

功徳は十方にみちたまふ

［平田］うれしくて最後泣けてきちゃいました。本当にうれしいですね。ありがとうございました。

［安藤］ありがとうございました。それでは以上をもちまして閉講させていただきます。最後までご清聴ありがとうございました。

ピアノ&うた　平田聖子
フルート　平田万喜
音響・企画支援　川井敏生
特別協力　名古屋音楽大学
主催　同朋大学仏教学科
おはなし&コーディネーター　安藤弥

（二〇一一年十二月二十二日　肩書・所属等は当時）